

出島村における生活行動に関する 地理学的研究

— 続 報 —

高橋 伸夫 ・ 市南 文一 ・ 伊藤 悟

I はじめに

I-1 研究目的

地理学は空間を尺度とする学問であると定義した Kant 思想が、衆知のように Schaefer¹⁾に否定されてから久しい。Schaefer は空間と時間の両者を地表事象の属性と主張したが、彼の主張を受け継ぎ、空間と時間の融合を試みた研究として、時空間地理学 (time-space geography) があげられる。この地理学は、Hägerstrand を中心とするスウェーデンの Lund 学派により創始され、既に多数の研究²⁾が発表されている。また、これらの研究に対する展望も、Kellerman³⁾、Parkes and Thrift⁴⁾、Pred⁵⁾および Thrift⁶⁾などにより行われてきた。

ところで我々は、第一報⁷⁾において、この時空間地理学の方法論を導入し、日本の農業地域における人間の行動を分析した。そこでは、1955年頃と現代における茨城県出島村の住民の生活行動を比較考察した後に、現代の生活行動の類型化を試みた。その結果、現代の出島村住民の生活行動は、農業従事者、漁業従事者、自営業者、通勤者および高齢（隠居）者の五類型に大別され、各類型には、特徴的なディリー・リズムが描かれた。

本稿は、上述の第一報と同様に、出島村住民の生活行動の分析を、研究目的として設定したが、この第一報の研究成果を発展させるために、具体的には以下の二点を研究目的とする。すなわち、その第一点は、出島村住民の生活行動を、明確な空間座標により定義し、その生活行動を考察する

ことである。第一報では、個人の生活行動に関して、明確な時間尺度が提示されていたが、空間座標はしばしば抽象化あるいは省略されていた。例えばレンコン栽培従事者のディリー・リズムの場合⁸⁾ある人間の一日を単位とした時間配分は、明確に表現されているが、時間消費がなされた地点は、自宅、ハス田および集荷場と記されているのみであり、これら三地点の関係位置あるいは絶対位置が、きわめて不明確である。そこで本稿では、生活行動の軌跡を、地図上に記すことにより、明確なディリー・リズムを描き、その生活行動を、時空間的に考察する。

第二の具体的な研究目的は、集団によりなされる行動の一部として、個人の生活行動を分析することである。第一報では、一個人の生活行動の記述に終始し、個人と他の人間との間に生起する行動の補完や排反に、関心が置かれていなかった。そこで本稿では、人間が生活する上で、最小単位の集団である家族に焦点を当て、その家族内における個人の生活行動の補完や排反を、特に空間的に考察する。

I-2 研究対象地域

一連の霞ヶ浦地域研究の一翼を担う本研究は、茨城県新治郡出島村村内に位置する戸崎、大前および内加茂の三集落を、研究対象地域として選択した。出島村は首都東京から70km圏内に位置し、その村域は霞ヶ浦西端から東へ舌状に突出する半島の大部分を占める。また同村は西で土浦市と千代田村、北東で石岡市に接する。同村の人口は17822 (1980年)であり、社会増加により今後の

人口増加が、期待されている。就業構造では、第一次産業人口が、かつて卓越していたが、近年その一部が第二・三次産業に急速に移行し、就業形態の都市化が進展している⁹⁾

研究対象地域とした戸崎、大前および内加茂の三集落は、出島村南西端に位置する。戸崎と大前の両集落は、いずれも50戸前後により構成され、また内加茂集落は、約70戸を擁する。各集落は台地上に位置し、台地間の谷地および戸崎集落の南の湖岸低地には、水田およびハス田が卓越する¹⁰⁾

I-3 研究方法

前述した研究目的の一つである家族内における生活行動の分析を行うために、研究対象地域内の家族を、以下の三類型に分類した。その三類型は、自立経営農家、第二種兼業農家および非農家である。この分類方法は、既に発表された霞ヶ浦地域研究報告の論文¹¹⁾に基づき、有効なものと考えられた。ただし上記の自立経営農家とは、「農家らしい農家」であり、一般に言われる専業農家および第一種兼業農家を包含する¹²⁾ 以上の三類型それぞれに関し典型的な家族を抽出し、その家族構成員の生活行動を、聞き取り調査により追跡した。ただし、典型的な家族を抽出する際には、第一報で描かれた生活行動の諸類型が、数多く網羅されるように配慮した。生活行動の聞き取りを行ったのは、1981年5月下旬の週日が主であり、天候による農作業の差異を考慮し、特に晴天日を聞き取り対象日とした。

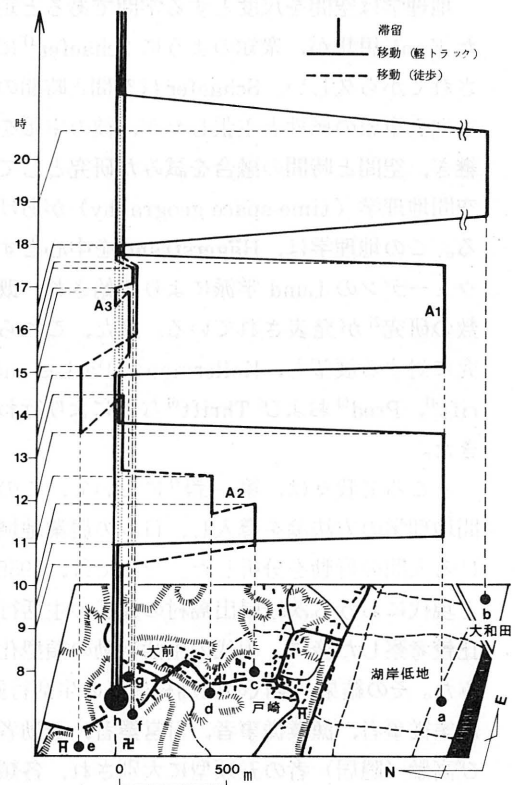
II 家族構成員の生活行動

II-1 自立経営農家

自立経営農家の家族構成員に関する生活行動を説明するために、AからDの四農家を事例とする。ただし、これら四農家のうち、AとBの両農家は、調査地域において特徴的なレンコン栽培を営む自立経営農家である¹³⁾ また、CおよびDの農家は、それぞれ果樹（主として梨）栽培農家、および養蚕・養豚の複合経営農家である。聞き取り調査を実施した各家族構成員の生活行動を、第1図から

第4図のように、時間と空間の両座標により規定される軌跡により表現した。以下では、これらの図を参考にしながら、家族構成員の生活行動を論述する。ただし、本研究の目的により、上記の各農業の詳細は省略する¹⁴⁾

A農家（レンコン栽培農家） レンコン栽培農家に分類されるA農家は、大前集落の北部に存在する。同農家は、三世代にわたる六人家族であり、老夫婦（夫74才、妻73才）、若夫婦（夫44才、妻44才）およびその子供（二人、高校生と大学生）により構成される。老夫婦と若夫婦の生活行動を、第1図に示した。



第1図 A農家（レンコン栽培農家）の生活行動
A₁. 若夫婦 A₂. 老夫 A₃. 老婦
h. 自宅 a. ハス田 b. スーパー（出島村大和田） c. d. g. 農家 e. f. 家庭菜園

最初に、レンコン栽培を経営する若夫婦の生活行動（第1図A₁）を記述する。若夫婦二人は、前述した調査対象日に、同様の生活行動をなした。

彼らの移動手段は、すべて自家用軽トラックであった。若夫婦二人は、朝9時30分に、自宅(第1図h)から、戸崎集落の南に広がる湖岸低地に位置するハス田(a)へ向かう。自宅とハス田間の所要時間は、軽トラックで約5分である。彼らは、ハス田で除草作業を行い、昼12時に帰宅し、昼食を取る。13時30分にハス田に戻り、除草作業を再開する。夕方16時に帰宅し、約30分の休息の後、買物のために出島村大和田に立地する某スーパー(b)へ向かう。彼らは、この時も軽トラックを利用したが、同スーパーまでの所要時間は、約20分であった。彼らはスーパーで食料品を買い求め、19時に自宅へ向かう。以上のように、若夫婦二人の調査日の生活行動は、自宅とハス田および自宅と某スーパー間において完結し、その移動手段は、すべて自家用軽トラックであった。

次に、老夫婦の夫(第1図A₂)について述べる。彼の調査日の移動手段は、すべて徒歩であった。彼は朝9時に自宅から戸崎集落の農家(第1図c)へ向かう。老人会の役員である彼は、この農家の老夫に、老人会の事務連絡を伝える。続く10時、同様な目的で、戸崎集落の他の農家(d)に、老夫を訪ねる。彼がこの農家を辞し、自宅に向かったのは、昼12時である。昼食後の13時、彼は畑(e)へ向かう。畑は大前集落の立地する台地上にあり、彼はここで白ウリの種まきをする。14時50分、この畑から大前集落の西端に位置する畑(f)へ移動し、そこでインゲンマメの収穫に励む。上記の二カ所の畑は、いずれも家庭菜園であり、そこでの収穫は、すべて自家消費となる。彼が収穫を終え、自宅に向かったのは、夕方16時である。以上のように、老夫の生活行動は、集落が立地する台地上でなされ、その移動手段は、すべて徒歩であった。

最後に、老夫婦の妻の生活行動(第1図A₃)を説明する。彼女の生活行動も、すべて徒歩によりなされた。彼女は13時30分まで自宅にとどまり、その後、大前集落内の農家(g)を訪ねる。そこで彼女は、その農家の老女と談笑し、15時にその

農家を辞す。彼女は一時帰宅した後、大前集落の西端にある家庭菜園(f)へ向かう。そこで彼女は夫とともに、インゲンマメの収穫を行い、夕方16時に帰路につく。以上のように、老婦の生活行動は、大前集落内に限定され、その際の移動手段は、すべて徒歩であった。

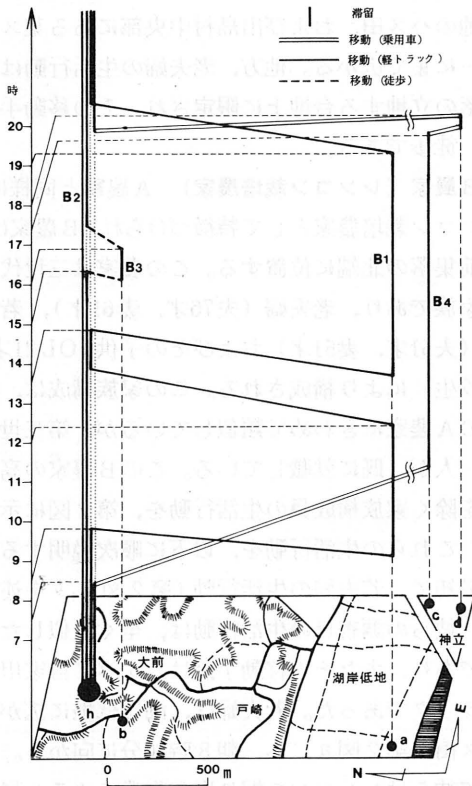
以上にA農家の二世帯四人の生活行動を論述した。これら二世帯のうち、若夫婦の生活行動は、軽トラックを移動手段とし、その移動範囲は、大前と戸崎の両集落が立地する台地から離れた湖岸低地のハス田、および出島村中央部にある某スーパーにまで広がる。他方、老夫婦の生活行動は、集落の立地する台地上に限定され、その移動手段は、徒歩である。

B農家(レンコン栽培農家) A農家と同様に、レンコン栽培農家として特徴づけられるB農家は、大前集落の北端に位置する。この農家は三世帯六人家族であり、老夫婦(夫76才、妻61才)、若夫婦(夫51才、妻51才)およびその子供(OL21才、高校生)により構成される。この家族構成は、前述のA農家にきわめて類似しているが、第三世代の一人が、既に就職している。このB農家の高校生を除く家族構成員の生活行動を、第2図に示した。これらの生活行動を、以下に順次説明する。

最初に、若夫婦の生活行動(第2図B₁)を述べる。彼らの調査日の生活行動は、全く類似したものであり、またその移動手段は、すべて自家用軽トラックであった。若夫婦は、湖岸低地に広がるハス田(第2図a)へ、朝8時30分に向かう。そこで彼らはレンコンの掘り取り作業をする。昼12時に帰宅し、昼食を取る。その後の13時30分、彼らはふたたびハス田に戻る。そこでレンコンの掘り取り作業に精を出し、彼らが帰路についたのは、日没19時である。以上のように、若夫婦の生活行動は、軽トラックを移動手段とし、その移動範囲は、湖岸低地のハス田にまで及ぶ。

次に、老夫婦の妻の生活行動(第2図B₃)について説明する。彼女は病気がちな夫(第2図B₂)を世話するために、一日の大部分の時間を費やす。

それゆえ、彼女が自宅を離れたのは、午後15時から16時までであった。その間に彼女は、大前部落西端にある家庭菜園へ徒歩で行った。この畑(第2図b)の面積は約0.8haであり、そこではキュウリ、ピーマン、ナス、インゲンマメおよびトウモロコシなどが栽培されている。A農家の老夫婦と同様に、彼女の生活行動でも、徒歩が移動手段であり、移動範囲は集落の立地する台地上に限定される。



第2図 B農家(レンコン栽培農家)の生活行動
(1981年5月,聞き取りによる)

B₁. 若夫婦 B₂. 老夫 B₃. 老婦 B₄. 娘
h. 自宅 a. ハス田 b. 家庭菜園 c. 事業所(土浦市神立) d. スーパー(土浦市神立)

最後に、第三世代である21才の女性の生活行動を記述する。彼女は土浦市神立に立地する第二次産業事業所に勤務する。週日の場合(第2図B₄)、彼女は朝7時30分に自宅から勤務地(第2図c)へ向かう。彼女の移動手段は、調査地域内に居住

する農外就業者の大部分と同様に、自家用乗用車である。自宅と勤務地間の所要時間は、自動車で約20分である。夕刻17時過ぎに、勤務地から自宅へ向かう。ただしその途中で、土浦市神立に立地するスーパー・マーケット(d)に立ち寄り、食料品の買物を済ます。休日の場合、朝9時に自宅から勤務先の事業所が所有するテニスコートへ向かう。この時も移動手段は、自家用乗用車である。彼女は昼まで事業所の同僚とともにテニスに興じる。12時に土浦市神立のレストランで同僚とともに昼食を取った後、筑波町に住む兄の下宿を訪ねる。彼女が帰宅したのは15時である。以上のように彼女の場合、通勤・余暇いずれの生活行動においても、自家用乗用車を利用し、その移動範囲は、他市町村へ及ぶ広範囲なものである。

上述のように、B農家の四人について、生活行動を考察した。若夫婦と老夫婦の二世代の生活行動は、前記のA農家の場合と、きわめて近似する。しかしながら、B農家の第三世代の女性の生活行動は、その移動手段および範囲に関して、既に記述したような特性を持つ。

C農家(梨栽培農家) 梨栽培による自立経営農家として特徴づけられるC農家は、内加茂集落に存在する。この農家は三世代六人家族であり、老夫婦(夫74才,妻72才)、若夫婦(夫46才,妻44才)さらにその子供(高校生と中学生)により構成される。若夫婦と老夫婦の生活行動の軌跡を、第3図に示した。

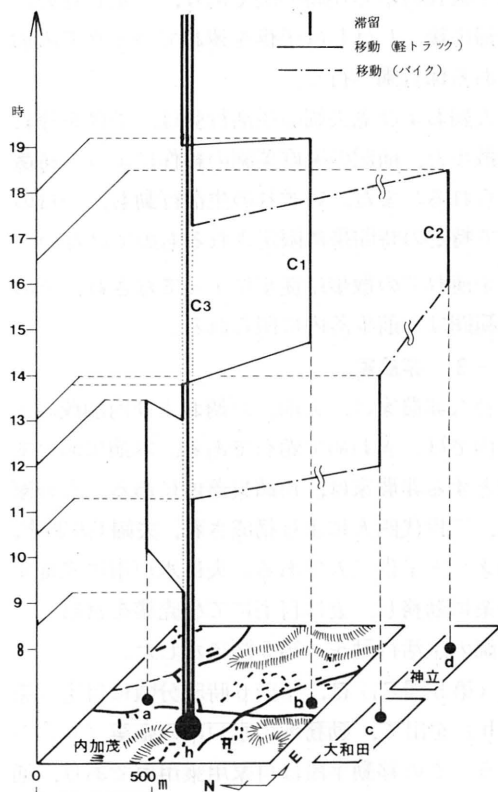
まず、梨栽培に携わる若夫婦の生活行動(第3図C₁)について記述する。彼らは朝8時30分に自宅(第3図h)から梨園(a)へ向かう。梨園は集落の立地する台地上にある。この時の移動手段は自家用軽トラックであり、自宅と梨園間の所要時間は、約5分である。彼らは昼12時に帰宅し、昼食を取る。13時に再び軽トラックに乗り、別の梨園(b)へ向かう。彼らが両梨園で行ったのは、梨の消毒作業であった。夕方18時に彼らは帰宅する。この若夫婦の生活行動の範囲は、前記の両農家の若夫婦の場合と異なり、集落の立地する台地

上に限定される。この理由は、農業経営の内容の差異に由来すると考えられる。

次に、老夫婦の夫(第3図C₂)について説明する。老夫は朝10時30分に自宅から出島村大和田に位置する村役場(第3図c)へ向かう。移動手段はバイクであり、自宅と村役場間の所要時間は約15分である。彼は老人会の役員の仕事のために、村役場に寄る。13時に村役場を辞し、土浦市神立(d)へ向かう。彼は生命保険の代理業を営んでおり、神立で保険契約をしている四世帯を回る。こ

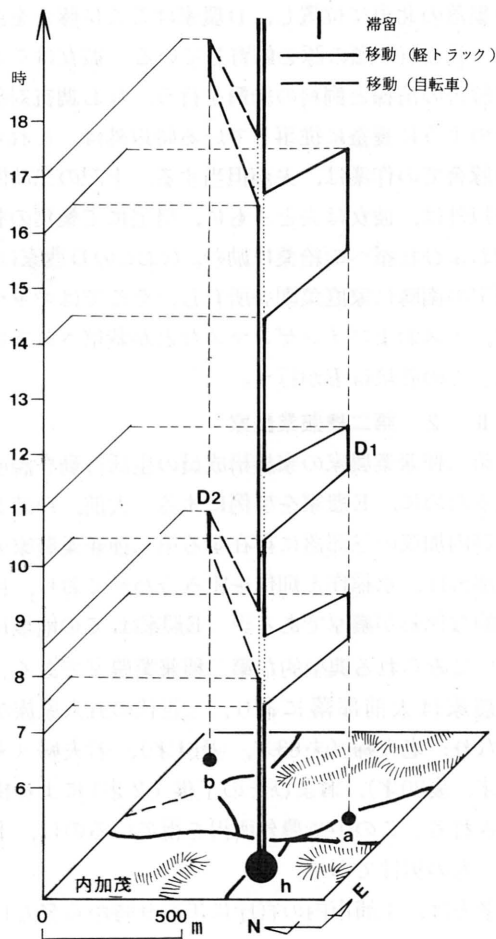
老夫の場合と異なり、他の集落あるいは土浦市にまで及び広い。この理由は、彼が移動手段としてバイクを保有し、また農業以外の職業に従事しているからと考えられる。なおC農家は、内加茂集落の近隣に家庭菜園を持つ。そこで自家消費野菜の栽培は、この老夫の任務である。

D農家(養蚕・養豚複合経営農家) 養蚕と養豚の複合経営をするD農家は、内加茂集落に位置する。家族は夫(55才)と妻(54才)の二人である。彼らの生活行動を、第4図に示した。



第3図 C農家(梨栽培農家)の生活行動
(1981年5月,聞き取りによる)
C₁. 若夫婦 C₂. 老夫 C₃. 老婦
h. 自宅 a. b. 梨園 c. 村役場(出島村大和田) d. 住宅・スーパー・医院(土浦市神立)

の途中、内科医院とスーパー・マーケットに立ち寄る。彼が神立から帰路についたのは、夕方16時である。彼の生活行動の範囲は、前述の二農家の



第4図 D農家(養蚕・養豚複合経営農家)の生活行動
(1981年5月,聞き取りによる)
D₁. 夫 D₂. 妻
h. 自宅・蚕室 a. 桑畑 b. 豚舎(養豚団地)

まず、夫の生活行動(第4図D₁)を述べる。彼は朝6時に自宅(第4図h)にある蚕室¹⁵⁾にて壮蚕に給桑した後、自宅から約100m離れた桑畑(a)へ桑摘みに出かける。このD農家は約90aの桑畑を所有する。彼は11時までに軽トラックで自宅と桑畑を二度往復する。その後、彼は再び蚕室にて給桑する。14時から16時まで桑畑へ桑摘みに行き、17時に三回目の給桑を行う。

また妻は7時30分から8時30分までと16時から17時まで二度にわたり、自転車で養豚団地に出かける(第4図D₂)。この養豚団地(b)は、内加茂集落の北東に位置し、D農家はここに豚舎を設け、約2,000頭の豚を飼育している。彼女はここで豚舎の清掃と飼料の給餌を行う。なお調査対象日のように養蚕に従事している時以外はこれらの豚舎での作業は、夫が担当する。上記の二時間帯以外は、彼女は夫とともに、自宅にて桑葉の整理および壮蚕への給桑に励む。なおこのD農家は、自宅の南隣に家庭菜園を所有し、そこではキャベツ、ナスおよびインゲンマメなどが栽培されている。この栽培は妻が行う。

II-2 第二種兼業農家

第二種兼業農家の家族構成員の生活行動を説明するために、E農家を事例にする。大前、戸崎および内加茂の三部落に存在する第二種兼業農家の大部分は、水稲作と畑作を組み合わせており、自給的な色彩が濃厚である。¹⁶⁾ E農家は、この地域においてみられる典型的な第二種兼業農家である。E農家は、大前部落にあり、三世代の五人家族からなり、老夫婦(夫63才、妻61才)、若夫婦(夫32才、妻30才)、およびその子供(2才)により構成される。この中で農外所得を得ているのは、上記二人の男性である。

老夫は、土浦市内の官庁に午前9時から夕方17時まで勤務する。彼は通勤のために自家用乗用車を利用し、午前8時に自宅を出発して午後17時30分に帰宅する。勤務先までの所要時間は、約30分である。彼が自動車で通勤を始めたのは、1966年以降である。それ以前の5年間はスクーターを、

さらにそれ以前には自転車を利用して通勤していた。彼は日曜日には畑作に従事する。畑地は自宅に隣接し、スイカ、キュウリ、インゲンマメ、レタス、ナス、ジャガイモ、ネギ、トウモロコシ、トマト、ニンニク、およびウリなどのきわめて多種にわたる自家消費用の野菜が作付けされている。

若夫婦の夫は、土浦市内の運送会社に勤務する運転手であり、日立市や水戸市などへの生鮮食料品の運送に携わっている。彼は午前6時30分に自家用乗用車で自宅を出て、運送会社に向かう。帰宅は午後16時から18時の間であり、一定しない。彼は帰宅後、しばしば子供を連れてバイクで内加茂にある保育園へ行く。

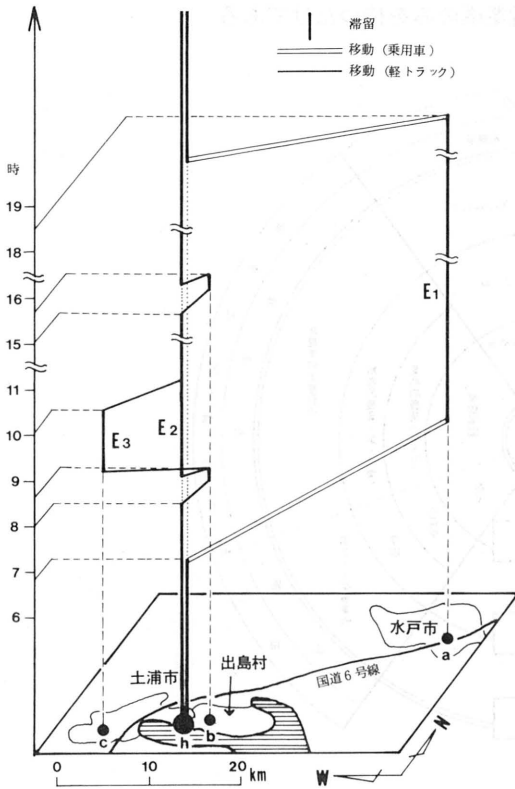
若夫婦および老夫婦の生活行動は、子供を連れての散歩と、前記の家庭菜園の耕作によって特徴づけられる。また、いずれの生活行動も、一日のなかで特定の時間帯に限定されるものではない。子供を連れての散歩は徒歩によってなされ、その移動範囲は大前集落内に限られる。

II-3 非農家

純粋な非農家は、大前、戸崎および内加茂の三集落内では、きわめて希有である。本節において事例とする非農家は、戸崎集落内にある。この家族は、二世代四人により構成され、夫婦(夫38才、妻35才)と子供二人である。夫は水戸市に立地する企業に勤務し、妻は自宅にて小売業を営む。この夫婦の生活行動を、第5図に示した。

夫(第5図E₁)は、午前6時50分頃に自宅(第5図h)を出て、勤務地の水戸市の企業(a)へ向かう。この移動手段は自家用乗用車であり、通勤所要時間は約1時間である。彼の帰宅は夜19時から20時の間である。自宅にて食料品販売店を経営する妻は、午前6時30分に店を開ける。その後彼女は、内加茂にある保育園(b)へ子供を送り届けるために、午前8時に自宅を一時離れる(E₂)。この時の移動手段は軽トラックであり、保育園までの所要時間は、約15分である。彼女の帰宅は8時45分になる。ところで一週間のうち火曜日と金曜日(E₃)は、保育園から土浦市内の食品卸売市

場(c)へ向かう。目的は食料品の仕入れである。彼女は午後15時から15時30分の間、子供を迎えに再び保育園へ行く。以上のように、非農家の生活行動の場合、その移動範囲は第二・三次産業が立地する村外にまで拡大し、その移動手段は自家用車である。



第5図 非農家の生活行動
(1981年5月、聞き取りによる)

- E₁. 夫 E₂. 妻 E₃. 妻(火曜日・金曜日)
h. 自宅・商店(出島村戸崎) a. 事業所(水戸市)
b. 保育園(出島村内加茂) c. 食品卸売市場(土浦市田中)

Ⅲ 生産行動からみた生活行動圏の構造

第二章に記述した各種の事例を基礎として、本章では家族構成員の生活行動圏を考察する。生活行動の中で特に生産活動に着目すると、三つの同

心円状に展開する生活行動圏、すなわち自給作物耕作圏、換金作物耕作圏および農外就業圏が抽出される(第6図)。各生活行動圏は、そこで行動する人間の属性、移動手段、圏域の範囲および土地利用により、特徴づけられる。以下に各生活行動圏を詳述する。

自給作物耕作圏 この生活行動圏の範囲は、きわめて狭いものであり、集落の立地する台地上に限定される。この生活行動圏内で行動をなす人間は、隠居者である老夫婦である。彼らは徒歩でこの行動圏を移動する。この行動圏内の土地利用は、宅地の他に、キュウリ、ナス、インゲンマメ、トウモロコシあるいは白ウリなどが栽培される畑地により、特徴づけられる。この畑地での栽培は、老夫婦に任せられ、そこでの収穫は、各農家の自給用となる。このような自給作物耕作圏を示す家族は、自立経営農家と第二種兼業農家であり、非農家はこの行動圏を有しない。

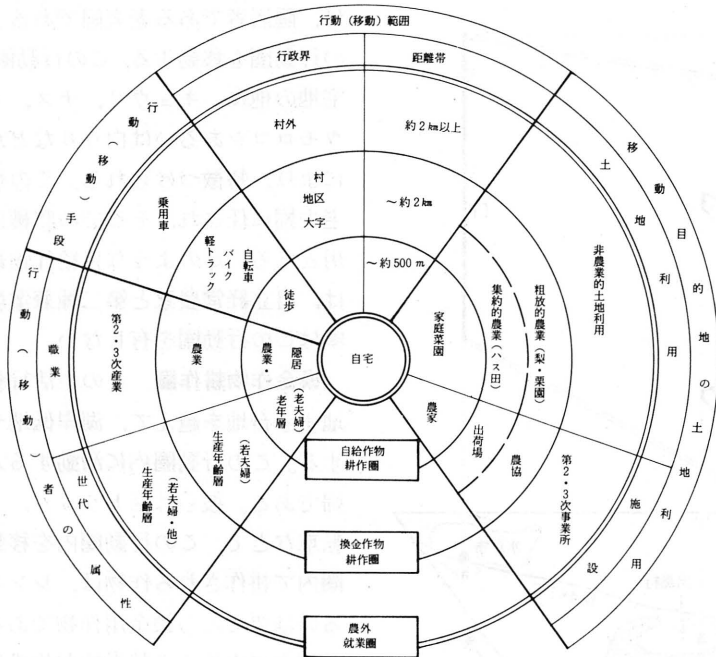
換金作物耕作圏 この生活行動圏は、集落の立地する台地を越えて、湖岸低地や台地にまで拡大する。この行動圏内に活動する人間は、主に若夫婦である。彼らは軽トラック、バイクあるいは自転車などで、この行動圏内を移動する。この行動圏内で耕作される作物は、レンコン、水稻、梨あるいは栗などの換金作物である。また、この行動圏内に立地する特徴的な施設は、集荷場あるいは農協などである。この行動圏が特に明瞭な家族は、レンコン栽培農家である。梨栽培、養蚕経営あるいは養豚経営の農家の場合、この行動圏は、ときには台地内で完結するが、それでも自給作物耕作圏より広い。この換金作物耕作圏は、第二種兼業農家と非農家には、認められない。

農外就業圏 この農外就業圏は、出島村村域外に及び、特に近隣の土浦市に伸びる。この生活行動圏内で活動する家族構成員は、若夫婦、特にその夫、およびそれ以下の生産年齢層である。彼らは、主に自家用乗用車を移動手段として、この行動圏内で活動する。公共輸送手段が利用される場合は、出島村ではきわめて希有である。この行動

圏の土地利用は、非農業的なものであり、そこに立地する第二・三次産業の事業所が、上記の家族構成員を吸引する。

以上のように、行動（移動）者の属性、行動手段、行動範囲および移動目的地の土地利用により特徴づけられる自給作物耕作圏、換金作物耕作圏および農外就業圏の三生活行動圏が、出島村にお

いて認められた。各生活行動圏の特徴を整理したものが、第6図である。言うまでもなく、これら三生活行動圏が、各家庭において、必ずしも共存する訳ではない。すなわち、自立経営農家では、農外就業圏を欠如する場合があります、また第二種兼業農家は、換金作物耕作圏を欠く。さらに非農家は、自給作物と換金作物の両耕作圏を欠き、農外就業圏のみを持つだけである。



第6図 生活行動圏の概念図

IV 結語

本稿は、第一報の成果を受け継ぎ、生活行動の時空間的な軌跡を家族単位に追跡し、出島村住民の生活行動を分析した。その結果、居住地を中心として展開する三重の生活行動圏が解明された。これらの三生活行動圏とは、自給作物耕作圏、換金作物耕作圏および農外就業圏である。第6図に示すように、それぞれの生活行動圏は、行動者の属性、行動手段、行動範囲および土地利用により、

特徴づけられるものである。

第一報では、不安期に生じる余暇行動と医療行動を除き、1955年頃の生活行動が、集落内ではほぼ完結したことを解明した。しかし、現代では、この生活行動の地域的展開は、第6図に示されるように、大幅に変容した。すなわち、現代においては、生活行動の地域的範囲が、世代ごとに分化しながら拡大した。この傾向は、第6図の農外就業圏の存在により、如実に提示される。この生活行動圏の分化・拡大の原因は、第一に近隣地域の

都市化に由来すると考えられる。すなわち、近隣地域における都市化の進展により就業機会が増大したため、出島村における農業労働力が都市労働力へ転換した。さらに第二の原因として、モーターリゼーションの急速な浸透を、指摘することができる。このような生活行動圏の分化・拡大は、ライフ・サイクルのリズムに基づく人間行動に、究極的に影響しよう²⁰⁾

しかしながら、1955年頃に存在した出島村住民の生活行動が、現代においてすべて崩壊した訳ではない。旧来の生活行動は、第5図に示す自給作物耕作圏に、根強く残存している。この生活行動圏が、老年層により形成されるからである。彼らは、自家消費のために農業を小規模に行うだけの隠居者である。また彼らは、モーターリゼーションの発展に十分対応しきれなかった世代であり、いまだ十分な公共輸送手段が全村に発達していない出島村において、徒歩以外に自らの移動手段を持ち得ない者達である。このために、老年層は旧

来の自給的な生活行動を、余儀なくされている。

人間の行動、特に移動行動に関する地理学的研究は、既に数多くの成果を世に残してきた。しかしながら大部分の研究は、都市や特定の施設などの結節点に集散する人間行動に基づく都市圏、消費者行動圏あるいは通勤圏などの様々な圏域の画定、あるいは結節点間の連結システムの構築に、焦点を合わせてきた。すなわち、空間的に所与な結節点の圏域あるいは連結システムを評価する資料として、人間の移動行動が利用されてきた。このような研究に対して、本稿は人間行動そのものに焦点をあてた。人間が形成する様々な組織の空間的・階層的特性²¹⁾あるいは人間行動の地表面への投影である景観などの説明に、本稿の成果は寄与するであろう。一方、人間が必要とする組織や施設を、人間行動の分析から、指摘することも可能である。それゆえ、本稿の研究結果は、空間計画・空間整備にも資するであろう。

本稿の作成にあたり、戸崎、大前および内加茂の三部落さらに出島村青年会の方々にお世話になりました。また、筑波大学地球科学系山本正三先生には、時空間地理学に関する文献を提示して頂き、同大学院生鳥谷均君には、聞き取り調査の協力を頂きました。ここに記して厚くお礼を申し上げます。

〔註および参考文献〕

- 1) Schaefer, F. K. (1970): Exceptionalism in geography: a methodological examination. *Ann. Assoc. Amer. Geogr.*, 43, 226-249.
- 2) 例えば,
Hägerstrand, T. (1970): What about people in regional science? *Pap. Regional Sci. Assoc.*, 24, 7-21.
Pred, A. (1978): The impact of technological and institutional innovations on life content: some time-geographic observations. *Geographical Analysis*, 10, 345-372.
- 3) Kellerman, A. (1980): Time-space approaches and regional study. *Tijdschrift voor Econ. en Soc. Geografie*, 72, 17-27.
- 4) Parkes, D. N. and Thrift, N. J. (1980): Time geography: the Lund approach. in Parkes, D. N. and Thrift, N. J.: *Times, Spaces, and Places: A Chronogeographic Perspective*. John Wiley & Sons, New York, 214-278.
- 5) Pred, A. (1973): Urbanisation, domestic planning problems and Swedish geographic research. *Progress in Geography*, 5, 1-76.

- Pred, A. (1977): The chreography of existence: comments on Hägerstrand's time grography and its usefulness. *Econ. Geogr.*, **53**, 207-221.
- 6) Thrift, N. (1977): *Concepts and Techniques in Modern Geography No. 13: An Introduction to Time Geography*. Geo Abstract, London, 36p.
- 7) 高橋伸夫・市南文一(1981): 出島村における生活行動に関する地理学的研究. 霞ヶ浦地域研究報告, **3**, 57~76.
- 8) 高橋伸夫・市南文一(1981): 前掲7), p.64, 第2図.
- 9) 浅見良露(1981): 戸崎・大前・内加茂における人口構造. 霞ヶ浦地域研究報告, **3**, 17~22.
- 手塚 章・浅見良露(1980): 労働力配分からみた近郊農村の微細研究——出島村大字戸崎を事例として——. 霞ヶ浦地域研究報告, **2**, 95~102.
- 10) 霞ヶ浦地域研究会(1980): 出島村南西部の土地利用——1979年5月——. 霞ヶ浦地域研究報告, **2**, 巻末折込地図.
- 山本正三・石井英也(1981): 出島村下大津の土地利用と景観. 霞ヶ浦地域研究報告, **3**, 1~15.
- 11) 手塚 章・浅見良露(1980): 前掲9).
- 手塚 章・奥井正俊・村山祐司・中川 正・加賀美雅弘・上田雅子・金 建錫(1981): 農業経営の変化と農家の存在形態. 霞ヶ浦地域研究報告, **3**, 23~56.
- 12) 手塚 章(1980): 大都市近郊外縁における「自立経営」農家の存在形態——茨城県出島村の事例——. 筑波大学人文地理学研究, **4**, 77~91.
- 13) 手塚 章・他(1981): 前掲11).
- 14) 各農業の詳細は, 下記の報告を参照されたい
- 内山幸久・上野健一(1980): 出島村における養豚業の展開. 霞ヶ浦地域研究報告, **2**, 69~84.
- 田林 明・菊地俊夫(1981): 出島村における養蚕業の変遷. 霞ヶ浦地域研究報告, **3**, 89~108.
- 手塚 章・他(1981): 前掲11).
- 山本正三・田林 明・菊地俊夫(1980): 霞ヶ浦地域における蓮根栽培. 霞ヶ浦地域研究報告, **2**, 1~16.
- 15) E農家の宅地利用は, 下記に示されている.
- 田林 明・菊地俊夫(1981): 前掲14), p.98, 第3図.
- 16) 手塚 章・他(1981): 前掲11).
- 17) この生活行動圏の拡大は, 人間の接触機会を増大させ, 例えば通婚圏の拡大を生み出そう. 下記の論文は, この点に対して予察を加えている.
- 南 繁佑(1981): 出島村における縁組による人口移動とその経年変化——通婚圏の画定を試みて——. 霞ヶ浦地域研究報告, **3**, 109~120.
- 18) 高橋伸夫・伊藤 悟・杉野光明・田上 顕・斎藤一彰(1980): 出島村における生活組織に関する地理学的研究. 霞ヶ浦地域研究報告, **2**, 17~36.